床家の集い」に対するニードは，ひろく全国的に高まってきている。昨年10月には，名古屋にひきつづいて，「'80年CPの集い」が八王寺のセミナー・ハウスで，全員合宿形態で設けられた。症例研究の1つの司会を，この場でもひきうけたのであるが，このような積み重ねをとおして，若い臨床家の育つことをまた期待してやまないものがある。

7）今年6月，東海心理学会は第30回記念大会を，愛知厚生年金会館で開催する運びに到った。依田新教授が，その礎を築かれて以来の30年の歩みである。この記念レクチャー・フォーラムでは，「明日の心理学に期待する」と題して，本学会の発展に寄与いたゞいた大先輩の先生がたからの提言を受けることになったが，このフォーラムを司会して，後学として，それらの提言にいかにこたえるべきか，その責務の重さを自らに問いかけながら，当東海地区の，また日本の心理学のさらなる発達を心から祈念した次第である。

（昭和56年7月29日）

研究経過報告 —昭和55年度

田畑　治

1. カウンセリング過程の研究　一昨年秋シカゴ大学のジェンドリン博士が日本心理学会の招きで来日し特別講演した。又その後の研修会で「フォーカシング技法」の手ほどきを受けえたことにより，名古屋地区でも，教養部伊藤義美助手らとともに研究会をもちつづけてきた。そこでの成果を「カウンセリング過程へのフォーカシング技法の適用（Ⅲ）」（日心第44回大会，55. 8，北大）と題して発表することができた。そしてさらに，この技法の重要性を再確認することができた。また依頼によってであるが，「カウンセリングにおける〝思いやり〟」（「児童心理」第34巻12号）でカウンセリングにおけるイメージの問題，カウンセラーの態度条件，「思いやり」——①「同情的理解」と「共感的理解」，②「尽力的顧慮」と「垂範的顧慮」（ハイデッガー，H.，ボス，M. ら）——の差異を論じた。

「ミニ試行カウンセリングについて」（東海相談学会第13回大会，56．3）では，学部卒業後のカウンセリング学習の基礎訓練の意義についてふれ，やり方のユニークさ，具体的なケース研究を発表した。全体のデータについては，目下整理中であり，次年度に持ち越されることになった。実験に参加し協力してくれた被験者の追跡的研究も必要であり，いましばらく，積極的に時間をかけてみつめていく必要があると考えている。

2. 心理臨床家の養成，教育・訓練問題について。1980年度「心理臨床家の集い」が秋たけなわの東京・八王子セミナーハウスで10月10，11日に開かれた。この集いは症例検討会と討論会とが中心の研究集会であるが，臨床心理学専攻の大学院レベルでの教育・訓練のモデルとして，今後も筆者の中で重要であると考えている。筆者自身，九大大学院出身のホープ遠矢尋樹氏の「登校拒否の訪問面接事例」発表のコメンターとなり，氏の精力的な取り組み，思春期症例での治療関係の構造化などにコメントできる機会を得た。スーパーヴィジョンの意義についても，さらに学ぶことができた。わが国の第一線の心理臨床家の集いとして，今後とも発展させていきたいものと考えている。

3. 臨床青年心理学への接近。　当学部の池田博和助手らと共同研究をはじめて，すでに4年目に入っている。隔週に開く青年期ケース研究会での共同討議をもとに，研究紀要にまとめることも定着してきた。今年度は，「思春期登校拒否と働くことの意義をめぐって」（東海相談学会第12回大会，55.3；研究紀要第27巻，55.12）を，伊藤義美助手とまとめた。挫折から自立をたどる過程で，かかる青年が〝中間地帯〟としてアルバイト先での人間関係をうまく確立し，心身ともに充実した体験学習をすることの意義を論じたのである。われわれは，これを学部での特定研究〝教育60年代研究〟の視野の中にも位置づけている。

4. グループ・アプローチ，エンカウンター・グループの実践研究。ここ4年間，毎年秋に本学学生相談室主催の自己発見のための合宿セミナーが学外の合宿所で行われてきた。55年度も，文部省の厚生補導特別企画の援助を得て行われた。この報告は，「昭和55年度厚生補導特別企画・第4回自己発見のための合宿セミナー」（名大学生相談室，56．3）に集録されている。

また第14回全国学生相談研究会議が正月明けの珍しく大雪降る博多で開かれたことも耳新しい。シンポジウム「厚生補導を問う」で治療心理学の立場から発題することができた。これは，「学生相談九州シンポジウム（昭和55年度厚生補導特別企画）報告書」（九州大学健康科学センター，56．3）に所収されている。

なお，目下筆者はエンカウンター・グループの実践フィー

ルドを拡大しつつあるが，仏教青年グループ，福祉関係者を中心としたグループ，産業グループなども行っている。いずれ，それらの共通構造，差異点をまとめたいと考えている。

5. ライプチッヒでの第XXII回国際心理学会議への出席とヨーロッパ臨床心理学関係機関の歴訪。

1980年7月6日から12日まで，東ドイツ・ライプチッヒのカール・マルクス大学を会場とし，W.ヴントがライプチッヒ大学に心理学実験室をつくり実験心理学の基礎を築いて百年を記念して開催された第XXII回国際心理学会議に出席する機会に恵まれた。当教室からは，大橋・久世両教授も出席された。海外での国際会議には初めて出席したのであるが，その後，教室主催で帰朝報告が行われた。また会議後，ヨーロッパの臨床心理学関係の諸機関を歴訪することができ，筆者の中で現地体験により，諸資料を入手したり，見聞を広めることができたことは望外の喜こびであった。ちなみにその主要な機関（所在地）を記しておく。ヴュルツブルグ大心理学教室（西ドイツ，ヴュルツブルグ），マックス・プランク研究所児童精神医学研究所および付属情緒障害児収容治療施設（西ドイツ，ミュンヘン），フロイト診療所（オーストリア，ウィーン），ユング研究所ならびにD.カルフ女史診療室（スイス，チューリッヒ），サルペトリエール病院・シャルコー記念館，サン・タン病院（フランス，パリ）などであり，それぞれ現地で関係者に歓迎され，意見交換できたことは生涯の思い出になったといえる。

6. その他の活動などについて

「来談者中心療法」（上里一郎編『心理療法入門』福村出版．55..8）

「カウンセリング療法」（詫摩武俊・稲村博編『登校拒否』有斐閣．55．9）

「いじめっ子にみられる親子関係」（『教育心理』第29巻2号，56．1）

「進路指導」他3項目．（河合伊六編『教育心理学の基礎知識』福村出版．56．1）

「高校生活の危機 ── 生活指導・精神衛生」のうち「ノイローゼ，登校拒否（drop-out，家庭内暴力も含む）（斉藤耕二・加藤隆勝編『高校生の心理』有斐閣．56．3）

「高校期の情緒障害」（全国里親会編『中学・高校期の里子の養育技術 ── 非行・情緒障害とその指導 ─』全国里親会．56．3）

《以下略》

研　究　経　過　報　告

池　田　博　和

1. 筆者の主要なテーマは，「青年期の病理と治療」にかかわる諸問題に人間学的視点から接近することにある。昨年はこの主題に関連して，登校拒否と家庭内暴力の問題をとりあげた（本紀要第27巻）が，その家族関係の問題に関心をだきながらも，今年はとくにそれを展開することはできなかった。しかしながら，新聞紙上等で「○○ヨット・スクール」や「○○牧場」などセンセーショナルな「治療法」が喧伝されている昨今，われわれはもっと正統な青年期危機治療論を具体的に公共化していかないと，ますます混乱した危険な事態に陥ってしまうのではないかと危惧しているところである。何々療法の名のもとに「外側から操作しよう」とばかりしている社会（あるいは家族）の側の発想自体が，実は彼ら青年の社会的未熟性を醸成してきた元凶なのであって，「甘えているのだから徹底的にきたえればよい」という安易な短絡思考にこそ，この問題の真の根源があるからである。重要なのは，「なぜ」彼らがそのように並はずれて，一見「甘えた」行動しかとれなくなってしまっているのかということこそが解明され理解されなくてはならないし，そのことの徹底的な理解と了解とに立った上で，彼らとともにそこから社会性や自主性を育くむ生活経験の幅を拡げていくよう，家族を含めて歩みだそうとするのでなくては，何ら本質的な解決にはならないのである。このような治療論を具体的に提示していく努力を今後にむけて重ねていきたいと思うものである。

今年は，青年期病理のサブ・テーマとしてはむしろ，「思春期やせ症」の問題により多くとりくんできたが，これも未だ公表しうるほどの成果はあげられていない。しかしながら，この問題に関する新たな発見としては，この状態像の本質が従来いわれてきたように，単に「女になりたくない」または「大人になりたくない」といったこと，あるいは「身体図式の解体」，または周囲からの期待過剰への拒絶といったことにあるのではなくて，もっと根源的にはそれらの現象の背後に「なぜ生きていかねばならないのか」という疑問，いわば「生命的存在感の自明性の稀薄さ」が底在しているということである。わ